米美知子［写真家］

Michiko Yone

DreamLabo 5000

私にとって、最終表現はやっぱり“プリント”。作品としての“プリント”を写真集として見てもらえることが、DreamLabo 5000 の一番すばらしいところ。

自然の風景を独特の視点で切り取り、色彩豊かな表現を描き出す写真家・米（よね） 美知子さん。個展や写真集の出版だけでなく、雑誌や書籍の執筆、写真教室講師など幅広く活動されています。

2017年3月、米さんは写真展「桜（はな）もよう」に合わせて会期限定・受注生産のかたちで写真集を製作しました。DreamLabo 5000 によってプリントされた作品には米さんが写し取った繊細な情景がそのまま描き出され、2分冊・箱入りのパッケージは作品の世界観を完璧に再現しています。

この作品集が作られた経緯とDreamLaboの印象、そして可能性について、米さんとデザインを担当した株式会社電通クリエーティブXの田代宏之さん、印刷・製本を担当したジャパンクリエイト株式会社の下山孝弘さんにお話を伺いました。

── 米さんとDreamLaboの出会いを教えてください。

米 • 銀座にあるキヤノンサロンで写真集を見たのがきっかけです。作家さんそれぞれの作品に合う、いろいろな用紙が使われていて、表紙からもプロのこだわりを感じました。「すごくいいな」と思いましたね。作品を印刷して本にしたというよりも、作品がそのまま写真集になっているという印象を受けました。

── 今回、DreamLaboを使って写真集『桜（はな）もよう』を作ることになった経緯を教えてください。

米 • 2017年3月から5月にかけて、全国3カ所のキヤノンギャラリーで写真展「桜（はな）もよう」を行なうことになりました。展示に合わせて文一総合出版から写真集が刊行されることは決まっていましたが、さらにDreamLaboでオリジナルプリントと同じクオリティの本も作ってみようかと思って。

正直、日本にはあまり“写真作品を買う”という文化がありませんから、高価な写真集は難しいんじゃないかなとも思いましたが、プリント作品と同等のクオリティが出せるDreamLaboのよさが伝われば、買っていただけるのではと思いました。また、アマチュアの皆さんにも撮り溜めた作品を1冊から本にできるんだよ、ということを伝えたいという想いがありました。アマチュアの方が出版社から写真集を出すことはとても難しいですし、自費出版でも最低500、1000という部数になってしまいますからハードルは高いと言わざるを得ません。写真を教える立場としても、こうした本を私が作ることで、生徒さんが「自分も作ってみたい」と思ってもらえたら成功なのかなと思って、今回の写真集を作ることを決めました。

── 今回の写真集は、半光沢のラスタータイプでプリントされた写真集と、紙の風合いを感じさせるファインアートタイプでプリントされた写真集、2冊が箱に収められた豪華本仕様になっています。この2つの用紙はどのように選ばれたのでしょうか。

米 • もともとは2分冊にする予定はなくて（笑）。写真展のプリントがラスタータイプだったので、“展示と同じものをお手元に”というコンセプトにするならラスタータイプと考えていました。でも、写真のテーマが桜でしたから、“和”のテイストを出すにはアート紙もいいかもしれないって思って、ラスタータイプとファインアートタイプ、2種類でテストプリントしてもらったんですね。そうしたら、アート紙がピッタリはまる作品もあって。それじゃあ、「もう、2冊にしちゃおう」と。

田代 • 和紙のような風合いのあるファインアートタイプでも作るということになって一気にデザインイメージも固まりましたよね。ただ、和紙を使うとなってからは質感や透け感、紙のサイズ、印刷適性など、いろいろなトライをしなくてはならなかったんですけど（笑）。

左：箱を閉じた状態。この箱がさらに専用のスリーブケースに収納されている
上：箔押しによって品のある仕上がりに

『桜（はな）もよう』
写真：米 美知子／デザイン：田代宏之
印刷・製本：ジャパンクリエイト
写真展「桜（はな）もよう」に合わせて制作された写真集。開いたときに2冊の写真集が同時に見えるよう、2冊を重ねるのではなく、箱の内側両面に本を納める構成になっている
仕様：上製本（W440×H305mm／写真右）+並製本（W430×H295mm／写真左）、箱・スリーブケース付き
用紙：ラスタータイプ+ファインアートタイプ
販売価格：50,000円

作品の前には薄い風合いのある紙に印刷されたタイトルが。1枚1枚異なる位置に印刷された桜の花びらは、すべて重ねると表紙の桜吹雪が完成するしかけ

ラスタータイプの作品集より。やわらかい桜の花びらの、繊細な階調が丁寧に描き出されている

ファインアートタイプの写真集より。湿度を感じさせる山桜の風景に紙の風合いがぴったりとフィットしている

── それぞれの紙の魅力はどのようなところにあるのでしょうか。

米 • ラスラータイプは表面のエンボスによって光沢感が出るところですね。ピカピカと派手な印象にはならないけれど、落ち着きのある華やかな表現ができる紙だと思っています。ファインアートタイプは和紙のような風合いがいいですね。写真=光沢というのが一般的な考えかたなので、“自然の風景写真にファインアートタイプ”という発想はなかったのですが、今回の作品テーマにはマッチしていると思います。

── ラスタータイプでプリントする作品と、ファインアートタイプでプリントする作品、それぞれはどのように選別したのでしょうか。

米 • 作品の再現性ですね。色が潰れてしまう写真はファインアートタイプのほうには入れず、作品を1枚の画（え）として見たときにアート紙に合うものがあればファインアートタイプのほうに入れていく。1点1点、再現性を確認しながら振り分けました。

田代 • 写真を鮮明に描き出すラスタータイプと、しっとりとやさしく描き出すファインアートタイプ。同じ写真でも、紙が違うだけでこれだけ表現が変わって見えるということに驚きました。自分の作品はどの紙に合うんだろうって、試してみたくなりますよね。DreamLaboにはそういった楽しみかたもあるんじゃないかな。

── 色校正について伺います。今回の写真集制作にあたっては何回くらい色校正をしたのでしょうか。

米 • 合計3回です。DreamLaboではあざやかに、きれいに出すぎてしまう色を抑える方向で調整をしていただきました。

下山 • 展示の出力を見本としていただいていたのですが、今回の出力では中間色の再現に特に気をつけました。空の霞の色のような、自然の淡い色が色転びしないように、あとは桜の花びらの色ですね。色々な桜の花びらがあるので、ひとつひとつ忠実に再現するということが、今回の色作りの一番のキモだったと思います。通常のオフセット印刷であれば、インクジェット印刷の展示に色を合わせるのは非常に困難ですが、同じインクジェット方式のDreamLaboなら、そうした色合わせができるのもメリットだと思います。

── 今回の写真集『桜（はな）もよう』を作り終えての感想と、DreamLaboの評価をあらためて伺わせてください。

米 • 購入されたみなさんは、「すごくよかった」と言ってくださいましたね。自分でもこのクオリティのプリントにチャレンジしてみたいという方もいて、DreamLaboで写真集を作った目的のひとつが達成できたかなと思っています。あとはA3相当の大型サイズにしたこともあり、「大きくていいね」という話もいただいて。大きく見せたほうが作品としての臨場感もありますよね。やっぱり“作品として”見て欲しいですから、この大きさにしてよかったと思います。

田代 • この本には、米さんの作品に対する想いや手にとってくれる方に対する想いを、デザインとして表現しなくてはダメだという使命感がありましたね。作品1枚1枚に価値があるというところを、見た人に感じてもらわないといけないと。だから、花びら1枚1枚の構成にしても、考え抜いてつくっているんです。そういうところで、米さんの作品性を、より魅力的に魅せられるグラフィック処理を目指しました。そうしたこだわりを感じてもらえたらいいですね。

米 • 田代さんは私の要望を聞いて、素材や印刷方法などいろんなものを調べてくださいました。この本ができたのは、田代さん、下山さんをはじめとするみなさんのおかげですね。

田代 • いろいろな写真家の方に、7色の豊かな色彩と、紙の違いによる多彩な表現を試してもらいたいですよね。DreamLaboでの写真集制作は、自分の作品のクオリティを上げるだけではなく、作品をつくるモチベーション自体を高めるきっかけになるのではないかと思います。

下山 • 私たちも毎回DreamLaboでいろいろなデータを印刷していますが、経験を重ねるたびに、DreamLaboの新しい可能性に気づかされます。データと用紙の相性を踏まえて、色を調整をするというノウハウも蓄積されてきていますし、今後、DreamLaboの表現力はますます広がっていくと思います。

米 • 写真展というのは展示期間が決まっていますよね。記憶に残すことはできるけど、記録として手元におくことはできません。でも、DreamLaboを使った写真集なら、写真展会場と同じクオリティのものをいつでも見たいときに見てもらえる。それは写真家としてはとても嬉しいものです。

写真展をオフセット印刷の写真集で残すということは普段から行なっていますが、オフセット印刷にはどうしても表現の限界があります。それはそれで仕方がありませんから、撮影データや解説を巻末に載せて、作品を深く知るための図録として見てもらうという役割を担ってもらうことになります。私にとって、最終表現はやっぱり“プリント”なので、その作品としての“プリント”を写真集としていつでも見てもらえることが、DreamLaboの一番すばらしいところだと思っています。

米美知子
Michiko Yone
写真家

1996年、独学で写真を始め、アマチュア時代は数々の賞を受賞。2004年にワイ．ワン フォト 米美知子写真事務所を開設。写真誌連載の執筆や、さまざまなメディアへの作品提供、講演会・トークショーへの登壇、コンテスト審査員など、多岐にわたって活躍している。

田代宏之
Hiroyuki Tashiro
株式会社電通クリエーティブX
ソリューションdiv.
グループ長 アートディレクター

下山孝弘
Takahiro Shimoyama
ジャパンクリエイト株式会社
フォトソリューション事業部
主任